

初期キリスト教建築様式 成立プロセスに対する考察

アルフォンソ・M・ファウゾーネ

初期キリスト教文化を示す最古の例証の数々は、ローマ皇帝時代の一要素を構成するものといえる。それは、使徒時代、及び、原始キリスト教会のキリスト教文化が、非キリスト教的状況下での文化から切り離されることなく存在した故である。しかしながら、キリスト教的なものすべてが、物質的存在に結び付けられていた訳でもなく、この時期においては、それは精神的・宗教的範疇にのみ見られる現象であった。ここに、原始キリスト教時代の他に比類のない特殊性を見ることができる。

この観点からのみ、最初の一世紀半におけるキリスト教の痕跡を僅かながら解き明かすことが可能となろう。現存する原始キリスト教的遺物の多くは、かかるものとして、異教徒による所産から識別されうることには非常に困難である。¹⁾

特に、このような現象は建造物、とりわけ原始キリスト教徒による礼拝と聖餐のための建造物に著しく見られる。こうした祈りや聖餐式はごく一般的な私宅で行われ、特定の目的性を有した空間ではなかった。当時のキリスト教徒の間には、固定された、聖なる祭壇は今だ存在しなかったのである。聖餐式に用いられた机は、日常の家庭生活に使用されていたものであった。正に、ここに初期キリスト教徒の祈りの場の持つ、世俗的性質としての現実があり、異教的環境における不信と拒絶を引き起こす原因ともなった。

このような現象の背景には、ユダヤ教の礼拝観念、及び、祭礼儀式に対

する緩慢な霊的成長を見ることもでき、それに伴い、後期ユダヤ教におけるエルサレムの神殿に対する理念も変化されていった。当時、世の終わりには、エルサレムの神殿は取り去られ、それに代わり、世に先立って、神によって天に創造された新たな神殿が地上に下されるであろうと信じられていた。この天上の聖所においては、もはや、いけにえによる燔祭も、薫香の供犠も存在し得ないのである。

このような宗教的・霊的環境の中でキリスト教共同体は成立した。神殿やシナゴグはイエスの活動の場であった。しかし、イエス御自身のうちにも、神殿に対する理念の著しい変化を見て取ることができよう。即ち、サマリア人の女性に語られた彼の御言葉がそれを証言している：「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない。そういう時が来ます。……しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのように人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」（ヨハネ、4：21、23-24）。

紀元70年、エルサレムの神殿崩壊後のユダヤ教では、神殿における礼拝は実際上不可能となり、そのため、神殿に対する精神的理念をヴィジョンとして保持し、信者の集会、即ち、シナゴグ（*συναγωγή*）において神を崇拜することを可能とした。それはシナゴグという言葉の本来の意味を示すものである。しかし、時の流れと共に、その言葉は、まず、祭礼用建造物を表すに至った。

最初のキリスト教徒たちもシナゴグにおいて、彼らの務めを果たしていたが、神への礼拝の中心であり、その実践としての主の晩餐でもって、初めて、キリスト教独自の典礼が成立した。この新しい礼拝共同体はエクレジア（*ἐκκλησία*）と名付けられた。これは共同体が集う家屋に対する名称ではなく、選ばれた者という意味である。このキリスト教共同体こそ、パウロによれば、神の神殿（1コリント、6：7；エフェゾ、2：21、及

び、次節)であり、しかも、地上における神の神殿なのである。²⁾

「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにお住みになりません」(使徒、17:24)。パウロがアテネでこう語った通り、真の聖所は人の手による建造物ではあり得ないのである(使徒、7:44-50)。

また、ヨハネの黙示録はキリスト教徒に最後の審判の後、新しい天のエルサレムが地上に下されることを約束している。即ち、信ずる者の共同体の存在は、この地上においては、天の神殿——神——を投射するに過ぎず、世の終わりの日に初めて真の神殿がこの地上に下されるというのである。³⁾

それ故、この地上における原始キリスト教会の聖所は、建造された聖所としての建築学上の構造を呈することは不可能であった。人間の手によって建造された神殿は、いわば、偶像と見做されたのであろう。

原始教会時代、地上の場としての礼拝場は具体的な目的性を兼ね備えた実用建築の域を脱し得なかった。それは、彼らの礼拝が聖なる場としての神殿の存在に対する形式的礼拝というよりは、むしろ、人間の癒しや救いを求める礼拝であった故である。原始キリスト教会は、それ故、宗教儀式用建築術を所有しないのである。宗教儀式用建築術が礼拝の本質に適さないとの事実は、高度文化の中でも比類のないものであり、このような状態は最も高度に精神化された礼拝を意味するものである。即ち、それはユダヤ教に始まり、キリスト教においてまず具体化され、原始教会において最終的に定式化された礼拝の霊的発展過程の頂点を示すものである。宗教儀式用建築——即ち、聖霊の神殿は、いわば、霊的構造を成すものであり、地上における世俗的建築を意味するものではなかった。それ故、聖所としての神殿はヴィジョンにおいてのみ可視的存在と成り得るのであり、それは秘義的思惟、あるいは、詩的・哲学的思弁の対象にすぎなかった。

一方、シナゴグ、あるいは、キリスト教徒の集会場所としての家屋に対しては、天の聖所、即ち、「天のエルサレム」の現存という前提のもとに、

この地上での精神化された建築としての「肯定的」評価が生じたのである。しかし、このような観念が信者を支配している限り、集会の場、また、礼拝の場はその真の宗教的意味合いを持ち得なかったのである。キリストの神秘体である共同体こそ、神の霊が住まわれる、神の居住の実現のための、いわば「聖所」であった。

ところで、初期キリスト教共同体が宗教儀式用建築物を持ち得なかった本質的理由を貧しさ故であるとする場合、キリスト教における、より深い宗教的・霊的前提、及び、画期的斬新さが全く見落とされ、同様に、財源豊富な初期キリスト教時代における宗教儀式用建築術の不成立という事実をも全く些細な問題と見做すこととなるのである。

幾世代もの間、キリスト教建築は世俗的域を脱し得なかった。集会の場には正式の祭壇は備え付けられてはおらず、聖餐の儀式は、この目的のために一時的に用意された卓上で行われ、その机は別の用途にも使用され、何ら宗教的性質を有するものではなかった。また、このような初期キリスト教徒の集会場所は芸術的様相をも呈していなかった。人間の業は聖なるものではなく、その結果としての所産が神の栄光に値しうるものではない故であった。この点については、アレクサンドリアのクレメンスが最も明確に叙述している。⁴⁾

クレメンスは礼拝用、あるいは、祭礼用建造物の神聖化のみならず、かかる建造物へのエクレジア (*ἐκκλησία*)、教会なる名称の命名に対しても一貫して拒否しつつ、祭礼用建造物が教会を意味しうるといった観念に反論している。信者の集合体である「エクレジア」なる言葉の概念は、それ故、紀元 200 年頃すでに、キリスト教徒の集会、及び、礼拝の場の意味に転用されていたといえる。しかし、それは従来の正規の教会を意味するものではなく、その言葉の持つ概念の変化は急激な信者数の増加に起因するものである。即ち、エクレジアなる言葉は、もっぱら、異教から改宗した人々によって用いられ、異教的世界と共に、彼らの観念もまた、エクレジアである共同体にもたらされ、様々な面に影響し、浸透していった。こ

こに、3世紀の祭礼用建造物の著しい発展を決定付けることとなった考え方が示されていると思われる。

こうした動向と平行し、教会内には新たな進展が見られた。それは——神との仲介者である大祭司はキリストに他ならないとする——原始教会が聖職者の位階制を否定したのに対し、当時の社会現象、時代要求の下に、教会内には天の位階制に習い、それを反映するべく位階制が成立したことである。共同体の首長である司教は、キリストに結ばれた地上における神との仲介者と見做された。それに伴い、教会機能の神聖化、及び、礼拝の場の神聖化に対する根本概念が生じた。とはいえ礼拝の場は、3世紀においてはなお、公的には世俗的域を脱し得なかった。生命のない物質から成る家屋が、神の神殿と見做されるべきではなく、その中に集まる共同体のみが神聖であり、あるいは、神聖とされうるとの、絶えず繰り返された警告がそれを証言している。これらの警告は、明らかに、キリスト教原始教会とは異質であった異教の観念に対抗するものであった。しかし、現実にはエクレジア——教会——、即ち、神の神殿なる言葉は、その名称においても、その概念においても、その範疇を広げ、礼拝の場にその意味が転用されていたことが窺われる。今や、キリストの神秘体である共同体、即ち、霊に生かされた神殿としての宗教的性質も、エクレジアという言葉と結び付けられ、徐々に、礼拝の場は神の住まわれる場、さらには、聖所としての意味合いを深めていった。

かかる文化的発展は、本質的には、4世紀初頭に完了したといえる。その最良の例として、4世紀の20年代中頃創建の建造物、ティルス(Tyrus)のパンリカが言及されえよう。この新しい建造物での共同の祭礼のために共同体はティルスに集った。そのみならず、彼らは太古の異教的風習、また、イスラエルの慣習に類似した新しい典礼儀式の証人でもあった：即ち、このティルスのパンリカは、聖餐儀式、及び、礼拝のための場として、その建造物を特別に聖別されたものとした。また、カイサレイア司教、エウセビオスが奉献式の有名な説教の中で、このパンリカを天上のエルサレ

ムの似姿と呼んだことにより、その建造物全体が極致にまで高められ、故に、ティルス⁵⁾の聖所は天上の聖所に匹敵するものとされた。また、司教エウセビオスはこの聖所を神殿とも呼んだのである。

この地上の教会建造物（*ἡ τῆς ἐκκλησίας οἰκοδομῆ*）、即ち、エクレジアのための建造物である教会堂は、本来のエクレジアそのものの意味を拡張、同時に、（*οἶκος θεοῦ*）*Domus Dei*=神の家、（*γὰος*）*aedes sacra*=聖所、*templum*=神殿の意味をも兼ね備えるようになった。しかし、この地上の聖所は天上の聖所をそのまま受け出した訳ではなく、その似姿として、また、それに準ずるものとして、即ち、神の神秘に満ちた可視的しるしとして認識されていたのである。

今や、祭礼用建造物は祈りやいけにえが捧げられるべく主の聖所としての聖なる空間となり、祭礼に関与するすべてを内包するに至った。まず、聖餐式のために使用された机は、聖餐式専用として条件付けられた祭壇へと徐々に移行し、それに伴い、典礼用具に対してもその聖性が与えられていった。

共同体メンバーに相對して、地上でのキリストの代理者である司教は、殆どの場合、半円形周壁に取り囲まれた後陣（アプス）にその座を占めている。その後陣に架けられた半円形丸天井にはキリストが描写されているケースが殆どであるが、その神性を示唆するものの神そのものではない。いかなる教会も神の住まわれる場、時を同じくして、各々の場に現存される一なる神の住まわれる場に他ならない。それ故、共同体のための礼拝用教会であれ、殉教者や聖人に奉獻された記念教会であれ、いかなる教会も地上における可視的存在としての神の王国を象徴するにすぎないのである。

教会は後期ユダヤ教、原始キリスト教、及び、原始教会が捨て去ったあの古い觀念を有した神殿ではない。キリスト教的祭礼用建築により、教会は新時代の前触れを告げた。教会は一神教的黙示宗教の領域において、永久に古代人の神殿イメージを切り捨てることとなった。同時に、それは新

しいキリスト教的祭礼用建築の発展のための、さらに、キリスト教芸術全般に渡る精神的前提であり、神学的基礎であった。

しかし、宗教的・霊的前提がこの新しい壮大な祭礼用建築様式成立のための一義的要因ではなく、312年のコンスタンティヌス大帝による教会の国家的容認という社会的要因こそが、その実現を決定的なものとした。それは公的権利を有した教会、即ち、国家、及び、皇帝権と突如、緊密に結び付いた教会成立のための前提であった。かかる現実が教会制度、あるいは建築物に影響力を有したことは当然であろう。⁶⁾

今や、教会建造物は一私的宗教団体による所産の域を脱した。即ち、古代ローマ時代後期存在した数々の混淆的密儀宗教の絶えず増加しつつあった礼拝の場の如き所産とは異なり、それまで、オリンポスの神殿、また、国教の神々が位置し、支配していた建築上の序列における最高位にまで上げられた。

これらの根拠を総合的に判断すると、教会建築、及び、キリスト教芸術において、即ち、いと高き神の栄光を表す聖所の具現的創造において、芸術的能力の自由な駆使が可能であったと思われる。教会建築における構造上の問題はコンスタンティヌス帝時代に始まったが、その独自の機能、及び、意味に応じて徐々に確立されていった。かかる壮大な教会建造物の必要因は、すでにコンスタンティヌス帝以前の時代にも見られた。機能的には、大所帯に脹れ上がった共同体メンバーに宗教上の祭礼や礼拝用の場を与えると共に、司教あるいは、彼の代行者が内陣に据えられた祭壇上で共同体のために典礼上の職務を遂行すべく場を与えることであった。また、教会建造物の象徴的意味は、先に詳しく述べた如く、天の聖所に代わるべきものであらねばならなかった。

従って、信者の分担によって行われる典礼儀式上の式次第、また、ミサ聖祭に直接携わる人々の位階制に準じた空間区分等が、設計全般を直接規定したであろうことも当然といえる。この社会的、即ち、階級組織的、また、神学的に規定された問題性は建築様式面においても同様に種々の解決

策が講じられた。

コンスタンティヌス帝時代には、教会建築の壮大な外観、及び、構造によって、一方ではキリスト教徒の聖所に対するこの新しい観念が、他方では、国家における教会の公的立場が明確とされた。教会はもはや単に宗教上の目的のために形式的に利用された私的空間構造を成すものではなく、コンスタンティヌス帝時代の教会建築には「構築意味が付与され」、今や、新しい宗教的・政治的意識の表現対象となった。

殆んどすべての地域において、村落においてさえ（例えば、北シリアの廢墟）、教会建築は壮大な外観を呈すると共に、豊富な特殊形式を備え、その発展と共に、キリスト教祭礼用建造物は都市、あるいは、村の住宅用建築物とその様相を異とし、今日においても、その識別は可能である。⁷⁾しかし、コンスタンティヌス帝以前の時代に関して言えば、3世紀の第2四半期に建造されたと考えられるドゥラ・エウロポス（Dura Europos）の私宅教会、また、コンスタンティヌス帝以前の時代に遡って年代決定されたローマの数例の私宅教会が示す通り、古代のキリスト教的礼拝の場がコンスタンティヌス帝以後の教会建造物とは構造上全く異なった様式学的性質を有していたことが判明した。それらはあくまでも実用本位の建造物であり、教会建築術の原則に基礎付けられたものでもなかった。こうした現実にもかかわらず、すでにコンスタンティヌス帝以前の時代、多分はや3世紀には、キリスト教的祭礼用建造物成立の事実もあり、その空間構成においては、後の建築様式の兆しを見ることもできる。即ち、長堂式空間構成がそれを示している。しかし、この時期における集中式空間構成による言及可能な対象は、現時点まで何一つ見出されていない。

教会建造物はコンスタンティヌス帝時代以後、その時々の変形を伴いつつ、長堂式建築、及び、集中式建築の2種類の基本タイプに代表される。長堂式建築では、単廊式空間構成と並んで、一段と高くなった中央身廊（高窓層）、あるいは、側廊上に階上間（matroneum）を備えた多廊式ホール構造が主流であった。この様式は教区教会堂、また、記念教会堂においても

適用され、一般に「キリスト教バシリカ」と呼ばれる建築様式である。

単一空間構造による集中式建築は殉教者記念堂（霊廟—Mausoleum）、あるいは、洗礼堂に圧倒的数の例証を見ることができる。その中には、多廊式身廊構造の側廊を巡らせた周廊付き例証も存在している。

また、霊廟、記念堂（Memoria）、礼拝堂（Oratorium）用に建造された単廊式、あるいは、多廊式十字形プランによる建造物の存在もある。かかる十字形プランが教区教会堂、及び、司教座教会堂に適用されたことは、明らかに、十字架のシンボルそれ自体から説明されよう。しかし、キリスト教建築それ自体に関していえば、建築形式は記念教会堂、あるいは、教区教会堂、（記念堂—Memoria、殉教者記念堂—Martyrion）といった特殊な目的性に規程されるものではないことが判明した。それ故、類似の構造プランによる霊廟や洗礼堂から、直ちに、象徴的要素を含んだ解釈や意味付けを推量すべきではないのである。初期キリスト教建築様式における形式や目的は、明らかに、相互無関係に可変的なものであった。⁸⁾

教会建築の様式上の起源は非常にデリケートな問題であり、「キリスト教バシリカ成立」に関する問題は学者間の関心事ではあったが、ある的確な結論を導き出すには至らなかった。特に彼らの関心は身廊式教会堂成立に関する問題に集中し、同心円状空間構成による集中式建築、即ち、周廊付き集中式建築等の成立に関しては二の次の感が窮われる。

ところで、キリスト教バシリカが古代ローマ建築よりの継承物なるや否や、あるいは、キリスト教徒による新しい創造物なるや否やに関する論争は、もはや当面の問題ではない。双方の見解ともその妥当性を証言している。かかる問題の本質はキリスト教身廊式、及び集中式建築すべての形式が古代、即ち、古代ローマ建築様式の伝統と発展に裏付けられていることにある。しかしながら、この形式に新しい意味と内容を与えるため、手近に存在した従来の様式を活用しつつ、新たな空間構成を整えたことにより、質的には全く新しい創造物であるとも言い得るのである：即ち、キリスト教建築は、一方では、古代建築様式の伝統を忠実に継承しつつ、他方では、

新しい独自の伝統の兆しをも窮わせるものである。⁹⁾

キリスト教バシリカ（即ち、一段と高められた中央身廊、あるいは、側廊上に階上間を備えた3廊、乃至は5廊のホール式建築）がいかなる古代ローマ建築タイプの継承物と見做しうるのか、即ち、いかなるローマ様式建造物とそのひな型として、また、原型として利用され得たかについては、今日もなお議論の余地を残している。学者の中には、多廊式バシリカ空間形式の原型を私宅バシリカの中に認めようとする者もいる。しかし、ドゥラ・エウロポスの例に見られるように、全く任意の空間構成をもつコンスタンティヌス帝以前の私宅教会（*Domus Ecclesia*）は、その構造形式からバシリカ様式を導き出すといった極端な追求や試みが問題の歴史的事実を踏まえたものではないことを示している。

数十年前、E・ディグヴェ（E. Dyggve）が大センセーションを引き起こした。彼は殉教者記念堂としての交叉廊（袖廊）付き、3廊式バシリカがヘレニズム時代の英雄廟（HEROIA）よりの派生であるとの試論を提案したが、今日、この命題の後継者を見出すことはできない。¹⁰⁾

また、バシリカの成立起源を街路に取り付けられたアーケード用列柱に求めた提案も存在した。この場合、天上の都としての教会建造物に関する命題が前提とされてはいるものの、吹放しの街路から屋根を架けたキリスト教バシリカの内部空間を強行に導き出すことは、新しい空間形式に対する問題を解明するには及ばなかった。それ故、この命題から導き出された様々な仮説は、論理的にも不十分なため、議論の対象ともなり得なかった。さらに、宮殿バシリカ、即ち、皇帝の玉座の間にキリスト教バシリカの起源を求める仮説も現れたが、これも学問的功献の跡は見られない。周知の、あるいは、復元上の玉座の間においても、多廊式身廊構造による例証は皆無故である。有名なアウラ・レジャ（*Aula Regia*）、即ち、ローマのパラティーノ丘にあるフラウィウス家の皇帝宮殿、玉座の間の場合も単廊式大広間であり、同様に、トリーアの皇帝バシリカも単廊式構造である。この二つの例証では、木骨天井構造という点で多廊式身廊構造によるキリス

ト教バシリカとの共通点を見出すことができる。これらの論述のいかなる場合も、「バシリカ」なる言葉の定義付け、その表現の使用に関しては、カイサレイアのエウセビオスが常に引き合いに出されている。彼はティルス**の**バシリカの献堂式のための説教の中で、神の家を、*βασιλειος οἶχος* 即ち、王の家と呼んだ。その場合、彼の言う「バシリカ (basilica)」なる言葉の意味、及び、その釈義においては、Basileus、即ち、王としてのイエスという観念が、確実に、決定的役割を演じていることを見逃してはならない。しかし、ここでは、歴史的証拠物件が問題とされているのではなく、その対象に対してなされた個人的解釈が問題とされるのである。それ故、エウセビオスによるこの根拠付けも、皇帝の所領からキリスト教バシリカを導き出すことは不可能である。

4世紀、バシリカなる表現はすでに様々な目的や形式、意味を表す建築学上の専門用語となっていたが、同時に、「ホール」というごく一般的意味をも有していた。「バシリカ」なる表現がこの一般的意味を有していたため、種々の形容詞を補うことにより的確な意味が表されねばならなかった。「バシリカ」なる言葉は教会建造物に対する名称として特に用いられた。4世紀初頭には、「*basilica dominica*」という表現が使われている（例えば、巡礼者エジェリア—Egeriaがしばしば用いている：*basilica id est dominicum*）。*Dominicum*、即ち、神の(家)というこの表現は名詞化された形容詞としても頻繁に用いられている。しかしながら、「バシリカ」なる言葉がキリスト教建築、及び、それに呼応しうる古代ローマ建築との関連性解明のために、ほとんど寄与するものを持ち得ないと考えられるため、その言葉、その意味の主要な発展にこれ以上立ち入る必要はないであろう。

さて、キリスト教バシリカ、即ち、3廊、あるいは、それ以上の多廊式教会建築の成立は構造形式上の問題であり、その解決のためには、建築形式上の構築部分相互の対比が必要とされる。¹¹⁾

レオン・パッティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti) はすでに500年前、古代ローマの公共バシリカとの形式上の共通性に基づいて、

3廊式キリスト教祭礼用建築の成立過程を推論した。この成立上の仮説は多少の変更と補足を伴いつつ、現在に至るまで支持されている。

事実、国家レベルの取引も頻繁に行われていた都市広場（Forum）に存在した古代ローマ建築様式の多廊構造ホール式建造物との関連付けは賢明であると思われる。¹²⁾

しかし、多廊構造によるホール式建築、即ち、木骨天井を架け、場合によっては、側廊上に階上間、あるいは、中央身廊部が突出した高窓を備えた構造形式は、キリスト教祭礼用建築成立以前にすでに用いられている。密教祭礼建造物、また、3廊式プランをもつシナゴグにおいてもこの建築様式はすでに見られる。中でもその最も良い例が後陣をもたぬミレートスのサラピス神殿であろう。その内部列柱廊は公共バシリカと同種の単一部分から成る伝統的構築形式を示している。地中海地方全域に存在する宮殿、及び、別荘用複合建築群においても、この建築タイプに属し、類似の多廊構造ホール式建造物を見出すことができる。しかし、この場合も、かかる例証からキリスト教教会建築を直接導き出すことは不可能である。現在までのところ、キリスト教バシリカの直接の先例と見做されるべく公共バシリカ、密教祭礼建造物、あるいは、私宅バシリカの例証は見出されてはおらず、今後もその可能性は希少であろう。それ故、その独自の形式において、また、その特殊性という点で、キリスト教バシリカは総体的には新しい創造物であると見做しうるのである。新たな考案部分以外は、多分、古代ローマの世俗的ホール式建築様式に由来すると思われる。¹³⁾

この新たな創造物の成立過程にコンスタンティヌス大帝、及び、彼の一族が決定的役割を演じたことは疑う余地がない。

ところで、公共バシリカ、及び、キリスト教バシリカ間の相違は非常に重要である。ここでは、特に際立った相違を指摘するにとどめよう。公共バシリカの場合、その大多数が幅広の横軸構造による例証が圧倒的である（例えば、ファーム〈Fanum〉のバシリカ、ローマのトラヤーヌス帝フォルム、特に、レプティス・マグナ〈Leptis Magna〉のバシリカ）。し

かし、すでにポンペイのバシリカでは、一方の短辺部に裁判官（裁定者）用の席を設け、他方の短辺部に玄関ホールを備えた縦軸構造をとっている。さらに、この関連タイプとして、2世紀末期の建造と考えられ、非常に重要な建造物である北アフリカ、ティパサ（Tipasa）のバシリカに注目しよう。この建築形式も同様に長堂式ではあるが、後陣をはさんで長方形の小部屋が並んでいる（この部屋は数世紀後には「パストフォリアー Pastoforia」と呼ばれるようになった）。ティパサのバシリカは驚くべきことに、その短辺部、即ち、後陣の反対側に置かれた入口部分には柱廊玄関を備えていた。ティパサのこのバシリカはキリスト教バシリカの最古の建築例以前に、すでに、バシリカの主軸が90度回転されていたことを物語るものである。¹⁴⁾

初期キリスト教バシリカのうちに、対面形式アプスを両短辺部に備えたフォルム・バシリカと比較しうる例証は見出せない。とはいえ、個々の建築タイプの相互関係を全面的に否定するものでもない。高窓層を備え、3廊、あるいは、5廊式タイプによるローマ市の世俗バシリカはすでに2世紀後半に存在したことが確証されている。¹⁵⁾ また、かつての大浴場を構成した建造物の中にも、3廊式ローマ建築様式による世俗バシリカの例証を見ることができ、これは4世紀に入り、サンタ・プデンツィアーナ聖堂（Santa Pudenziana）に改築された。このバシリカでは、半円アーチ、及び、円柱アーケードによって3廊を結んでいる。一方、当時の世俗バシリカでは、その大半がすでにアーキトレーヴ式列柱廊、及び、アーケードを同時に使用していた。¹⁶⁾

キリスト教バシリカの各構築部分はその他、殆どの異教的3廊、あるいは、5廊式公共バシリカ、また、同系の建築物にも確認されうる。それ故、キリスト教バシリカに見る新たな面はその空間形成であり、概に完成の域に達し得た個々の構築部分の調和的結合であり、さらに、多廊式ローマ様式公共バシリカに最も近似した全体構成であるといえる。

それ故、壮大な3廊、乃至は、5廊式に至るキリスト教バシリカに対す

る最初の構想は古代ローマ建築の領域、即ち、公共バシリカからインスピレーションを受けたと断言しうる。多廊式異教集会ホールの基本構造は建築プログラムの実際の要求に最も適ったものであり、その上、公認され、公的にも影響力、また、権力を増大し、皇帝の保護の下、まもなく国教に昇格した教会の権力を示すためにも最も近い存在であった。既存の建築学的構築プログラムは、多数の人間が使用可能な種々の規模のホール用建築としてのあらゆる可能性をすでに含んでいた。多廊式古代ローマ構築プログラムは列柱廊、あるいは、アーケードによって内部空間に特別の壮大さを与えるのみならず、いかなる規模にも適応可能であり、最終的には、多廊式ホール、付属建造物、及び、特殊用途建造物間の調和のとれた複合構成をも可能とした。

既存の建築プログラムのキリスト教バシリカへの転用は、わずかな変化を必要としたのみであった。この変化は本質的には典礼中心という明確な目的性を与えるため、西—東、あるいは、東—西という方向性が定められたことである。その方向性は至聖所へと集中し、後陣において終了する。後陣は場合によっては、キリスト教以前のシリア、及び、北アフリカにおいてすでに見られるような、側室を両側に備えたケースも存在している。¹⁷⁾

また、交叉廊(トランセプト)、即ち、身廊と後陣の間に位置する交叉状空間の結合例は、すでに、異教バシリカの領域においても同様に、その例証、及び原型を見ることができる。

今一つ、重要な結合構造であるバシリカの前庭、即ち、教会堂の西側、あるいは、東側の入口前面に位置する、いわゆるアトリウム(教会堂の南側長辺部に位置する例も存在する)は、すでに異教バシリカにおいて用いられていたポーチの応用といえる。

この新たな創造、また、これと結合した適応例は、確かに、画一構造建築タイプを産み出したのみならず、その地理的要因、また芸術的個性の自由な行使に容易に委ねられた豊かなヴァリエーションをも生み出した。コ

コンスタンティヌス帝時代の建築家は従来の構築部分、例えば、多廊式内部空間、あるいは、同一の伝統を引く個々の構築部分、即ち、アトリウム、凱旋門形アーチ、アプス、交叉廊等の結合によって最初の壮大な教会建造物を考案した。この「建築構造上の個別部分」は、今や、教会建造物という目的性に應えるべく、また同時に、当時の美的感情、もしくは、形式美にふさわしく統合されたといえる。

各地のローマ地方行政区においては、地方色豊かな建築学的伝統もまた、決定的役割を演じた。北シリアでは、初期キリスト教時代に、別荘用建築システムから教会として発展した複合建造物を認めることができる。キルク・ビゼ（Qirq-Bize）の教会堂の場合、隣接する別荘と教会堂を区分することは非常に困難である。¹⁸⁾ 総合的概念を構成する主要な特徴上の統一性は、古代後期の文化全体を通し、北海からアトラス山脈、及び、ナイル川に至るまでの、また、大西洋からザグロス山脈に至る広大な範囲に渡って展望されねばならない。ローマ、聖地、及び、コンスタンティノポリスにおける教会建造物に対する皇帝のイニシアチブが教会建造物共通の基礎付けと設計上、また、西方世界におけるかかる建築タイプの普及のために理想的であったことは多くの点から認めうる。

さて、集中式建造物の発展において、同心円状空間構造建築物の場合、教会儀式に対応すべく別個の必要条件を有しており、単一空間構造による集中式教会建造物は、従来の伝統的、古代ローマ様式建築学上の形式プログラムを継承し、部分的にはそれをさらに発展させているといえる。周廊付き集中式建造物では、既存の記念建造物を忠実に受け継いでいるものの、コンスタンティヌス帝時代の教会建築内部構造は全く新たに考案されたものといえる。周廊付き集中式空間構造の着想は、建築学上、決定的段階を位置付け、特に、東方世界では広範囲に渡り重大な影響力を及ぼすこととなった。¹⁹⁾

この建築学上のニューフェイスをその類型、及び、その構築意味において全く新たな建築プロジェクトとして取り扱うことは十分に可能である。

その代表的建造物がキリストの墓を含む聖所、即ち、アナスタシス（Anastasis—復活の円形堂）である。²⁰⁾ キリスト教にとってのこの最大の聖所は円蓋構造でおおわれ、そこには、その重要性と大きさを表すための最も賢明な解決策が見られる。キリストの墓を中心に、その周りを列柱で支えたリング状の周廊が取り巻き、アーケードによって中央部と周廊部を結んでいる。この建築構造では、崇拜の中心である中央広間が至る所から見られ、その周囲を巡ることを可能とした。アーケードは空間的広がりやを区分する一方、各々の関連性を断つことはなかった。周廊付き集中建築は非常な困難を伴ったとはいえ、構造力学上の問題を解決し、さらに広大な空間に単一ドームを架けることを可能とした。リング状穹窿を架けた周廊は円蓋の補強と控壁としても有効であった。

それ故、宗教上の意味、及び、目的によって、独自の新たな有用性を備えた周廊付き集中式建造物の発展において、既存の建築学的形式プログラムは様々な構築部分に引き継がれた。周廊を備えた新たな考案による建築タイプは、さらに、周廊、及び、階上間付き八角堂集中式建築へと発展していった。この八角堂タイプはコンスタンティヌス帝が東方の首都、オロンテ河畔のアンティオキア（Antiochia）に建造した新しい宮廷付き聖堂の構築プロジェクトに明確に認められる。この建築タイプは、続く数世紀に渡って、広く東方において、また、西方においても同様に、周廊付き八角堂集中式建築の大いなる発展への道を開いた基礎であり、起点と見做されねばならない。²¹⁾ 然り、エルサレムのアナスタシスの基本構造はローマに建造されたコンスタンティヌス帝の娘、コンスタンティア（Constantia）の霊廟にすでに適用されている（A. D. 340-350）。この霊廟は今日残存する周廊付き集中式建築の最良の例証といえる。²²⁾ この確立された集中式建築タイプは他の構築プロジェクトにも広く応用され、以下に示すような八角堂建築への適用プロセスを列挙しうる：エルサレムのアナスタシス、ローマのコスタンツァ霊廟（Santa Costanza, Mausoleo di）、アンティオキアの聖堂、コンスタンティノポリスのハギイ・セルギオス・

ケ・バッコス聖堂 (Hagii Sergios Kai Bacchos)、最後に、ラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂 (San Vitale)。²³⁾

これらの教会建造物では、次のような長堂式、及び、集中式構造様式上の共有が見られる：彩光用の高窓層は中央部分に特に高く強調され、これを低い周廊が取り巻いている。また、アンティオキアの例証、コンスタンティノポリスにおける後期集中式建造物、そして、ラヴェンナの場合に見られるように、かなりのバシリカ式建造物の側廊同様、周廊部が2階建てとなり、階上間を備えた後続例を見出すことができる。

4世紀に入ると、さらに、礼拝堂、墓廟、あるいは、殉教者記念堂のための教会建築としての十字形建築が成立した。この建築構造が最初、どこで使用されたかは推量されるに過ぎない。²⁴⁾ この新しい十字形建築は十字形状翼部が小規模な単廊構造、今一つは大規模な多廊構造の二大グループに大別される。双方ともその平面プランは縦軸が伸ばされたラテン十字形、及び、翼が同一長さのギリシア十字形を基本構造としている。

小規模十字形建造物の成立には古代ローマ建築様式内に種々の先行プロセスを認めることができ、ローマ皇帝時代初期に、はや、その先行例を見出すことができる。例えば、アンギュラーラ・サバツィア (Anguillara Sabazia)の帝国前の別荘地の中央には、外観構造において十字形翼を持つ小さな一戸建て建造物が存在した。さらに、ローマの霊廟のかなり例証が様々な外形による小規模十字形構造を呈している。中には、外観からは十字形状翼部が認められず、重厚な外壁の中に隠されている場合もある。十字形翼部は、ほとんどの場合短かく、低く、死者の埋葬のために使用された。しかし、ローマに建造されたネロ皇帝の黄金宮殿 (Domus Aurea)の場合、「十字形翼部」は長方形の中央部分とほぼ同一高さを有していた。1、2世紀の浴場に見られる十字形空間形式は外観構造においては認められず、複合建造物、各々の平面プランにおいてのみ認めることが可能である。²⁵⁾

4世紀以降の小規模キリスト教十字形建造物の場合、翼部は大方中央部

分より下位に位置し、内部空間の広がりの方で翼部は非常に重視され、外観構造においても、明らかに際立って表現されている。ここに、前段階の先行例とはその外観を大いに異とした新しい建造タイプが成立した。

続いて、壮大な大規模十字形構造による教会建造物へと移ろう。その創建は4世紀と考えられる。この種の最初の壮大な建築例としては、コンスタンティヌス帝によりコンスタンティノポリスに建造された聖使徒教会と考えられるが、實際上、そのわずかな痕跡も残されていない。その存在、スケール、所在地については当時の記録から知るのみである。4世紀にはまた、アンティオキア近郊のダフネ (Daphne) にバビュラスの殉教記念聖堂が建造された (紀元、379年頃)。この場合の十字形翼部は同一長さではあるが、正方形の中央部分から25m以上も低い構造を呈している。さらに、時代をほぼ同じくして、ミラノの司教、アンブロシウスはラテン十字形の外形をもち、使徒に捧げられた記念聖堂を建造させた。ここでも、単廊の身廊部に接した十字状の翼は、身廊部より低い構造を呈している。この十字形バシリカは、ミラノに建造されていた聖シンプリチアーノ・バシリカを原型としている。かかる壮大な空間構成はキリスト教以前の建築様式からはいかなる例証も見出せない。²⁶⁾

また、4世紀には、3廊式十字状翼を有した集中式十字形建築の最初の例証が成立した。それは聖地、シェケム (Sichem) に近いヤコブの井戸の上に建造され、かつては非常に有名な巡礼参詣教会であった。この重要な記念教会堂では集中式、及び、バシリカ式構造の結合が見られる。これを先行例として、5世紀、最後の四半期、アレppo (Aleppo) の北西部に、柱頭隠者、聖シメオンの殉教記念聖堂が建造された。これは貴重な遺跡として現在もなお残存している。この遺跡の壮大な複合建築群の中央には、4本の3廊式バシリカが接合された八角堂集中式建造物が造られていた。以上の概観に基づき、4世紀の独創性に豊んだキリスト教建築様式は構造形式上、次のように総括され得よう：まず同心円状空間構造による集中式建築、及び、内接空間構造において、また、外観構造において十字形を呈

した壮大な十字形建築の二大構造に大別され、これらの建築タイプは多廊式身廊構造との結合において、初期キリスト教時代における空間的要請上の解決策としての豊かな多様性を提示すると共に、現代に至るまで、空間構成における決定的転機とされている。

注

- 1) このテーマに関する詳細な文献は以下の通り：Reallexikon für Antike und Christentum, hrsg. von Th. Klauser, Stuttgart 1941 以後, Bd. I: ARCHITEKTUR (604-613), BASILIKA (1225-1259); 及び Reallexikon zur Byzantinischen Kunst, hrsg. von Kl. Wessel, Stuttgart 1966 以後, Bd. I: BASILIKA (514-567); 更に Spätantike und Frühes Christentum, hrsg. von Beat Brenk, in: Propyläen Kunstgeschichte Suppl. Bd. I, Oldenburg i. O. 1977, 16-60 頁, 107 頁以下, 333 頁以下; Carl Andressen, Einführung in die Christliche Archäologie, in: Die Kirche in ihrer Geschichte, Göttingen 1971, Bd. 1(B), 23-41 頁; Richard Krautheimer, Corpus basilicarum Romae. Le basiliche cristiane antiche di Roma (sec. IV-IX) in: Monumenti di Antichità Cristiana, seconda serie, II, Vol. I-V, Città del Vaticano 1937-1977; R. Krautheimer, Early Christian and Byzantine Architecture, in: The Pelican History of Art 224,² (1975); R. Krautheimer, Rome-Profile of a City, 312-1308, New Jersey 1980, 3-142 頁; Pasquale Testini, Archeologia Cristiana. Nozioni Generali dalle origini alla fine del sec. VI, Roma² (1980), 547 頁以下; P. Testini R. Giordani, Archäologische Zeugnisse des Christentums, in: Die Illustrierte Weltgeschichte der Archäologie, München² (1983), 273-293 頁。
- 2) P. Testini, Archeol. Cristiana, 547 頁以下参照。
- 3) このテーマに関しては La Gerusalemme Celeste, hrsg. von M. L. Gatti Perer, in: Vita e Pensiero, Milano 1983, 33 頁以下; 更に F. W. Deichmann, Vom Tempel zur Kirche, in: Mullus, JbAC 1964, Ergbd. 1, 52-59 頁。
- 4) Clemens von Alexandrien, Stromata 7,5=GCS. Clem. 3, 20, 18 以下参照。
- 5) カイサレイアのエウセビオスの説教に対する注釈、及びその引用箇所については B. Sauer, Symbolik des Kirchengebäudes und seiner Ausstattung in der Auffassung des Mittelalters.² (1924), 99 頁以下を参考とした。ティルス建造物はソロモン神殿、またキリスト教精神に鑑みた密教建築とも比較される。
- 6) Charles Pietri, Roma Christiana-Recherches sur l'Eglise de Rome, son Organisation, sa politique, son ideologie de Miltiade à Sixte III (311-440), B.E.F.A. R. 224, Bd. I, II, Rome 1976 参照。

- 7) P. Testini, Archeol. Cristiana, 531 頁以下参照。
- 8) Age of Spirituality-Late Antique and Early Christian Art, Third to Seventh Century, hrsg. von Kurt Weitzmann, New York 1979, 109-123 頁; 263-268 頁; 350-364 頁; 640-669 頁。
- 9) P. Testini-R. Giordani, Archäol. Zeugnisse des Christentums, 274 頁以下。
- 10) E. Dyggve-F. Poulsen-K. Rhomaios, Das Heroon von Kalydon (1934), 411 頁以下; J. B. Ward-Perkins, Memoria, Mary's Tomb and Martyr's Church, in: Akten VII. Int. Kongr. Christl. Archäologie (1969), 3 頁以下において英雄廟に関する命題に対し反論した。
- 11) P. Testini, Archeol. Cristiana, 561 頁以下参照。
- 12) op. cit., 548 頁参照; 更に F. W. Deichmann, Entstehung der Basilika und Entstehung des Kirchengebäudes, in: Kunstchronik 4 (1951)=Roma, Ravenna, Konstantinopel, Naher Osten. Gesammelte Schriften ... (1982).
- 13) J. Ward-Perkins, in: Akten VII. Int. Kongr. Christl. Archäologie 1965 (1969), 20 頁以下参照。
- 14) Ernst Langlotz, Der architekturgeschichtliche Ursprung der christlichen Basilika. Rhein. -Westfäl. Akademie der Wissenschaften G 172, Opladen 1972; 更に P. Testini, Archeol. Cristiana, 698 頁以下。
- 15) E. Nash, Pictorial Dictionary of Ancient Rome,² (1968) Vol. I, 180-182 頁参照。
- 16) A. Pertignani, La Basilica di S. Pudenziana in Roma, Città del Vat. 1934 参照。
- 17) P. Testini, Archeol. Cristiana, 559 頁以下参照。
- 18) P. Testini, op. cit., 554 頁; 611 頁参照。
- 19) P. Testini, op. cit., 651-665 頁参照。
- 20) P. Testini-R. Giordani, op. cit., 282 頁以下; キリストの墓に関する研究の特に詳細な叙述としては: V. C. Corbo, Il Santo Sepolcro di Gerusalemme. Aspetti archeologici dalle origini al periodo crociato, in: Studium Franciscanum, Collectio maior, 29, Jerusalem 1982.
- 21) F. W. Deichmann, Das Oktagon von Antiochia: Heroon-Martyrion, Palastkirche oder Kathedrale?, in: Byzant. Zeitschrift 65 (1972), 40 頁以下。
- 22) Spätantike und Frühes Christentum, bes. 48 頁以下; 111 頁; 115 頁; 121-123 頁; 及び A. Khatchatrian, Origine et Typologie des Baptistères Paleochrétiens, Mulhouse 1982 参照。
- 23) P. Testini, Archeol. Cristiana, 660 頁以下参照。
- 24) op. cit., 665-671 頁; 719-720 頁。
- 25) S. Guyer, Grundlagen mittelalterlicher Baukunst (1950), 58 頁以下; 517 頁以下参照。

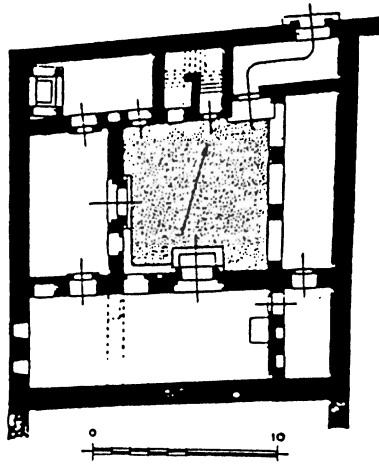


図1. ドウラ・エウロポス、私宅教会、230年頃

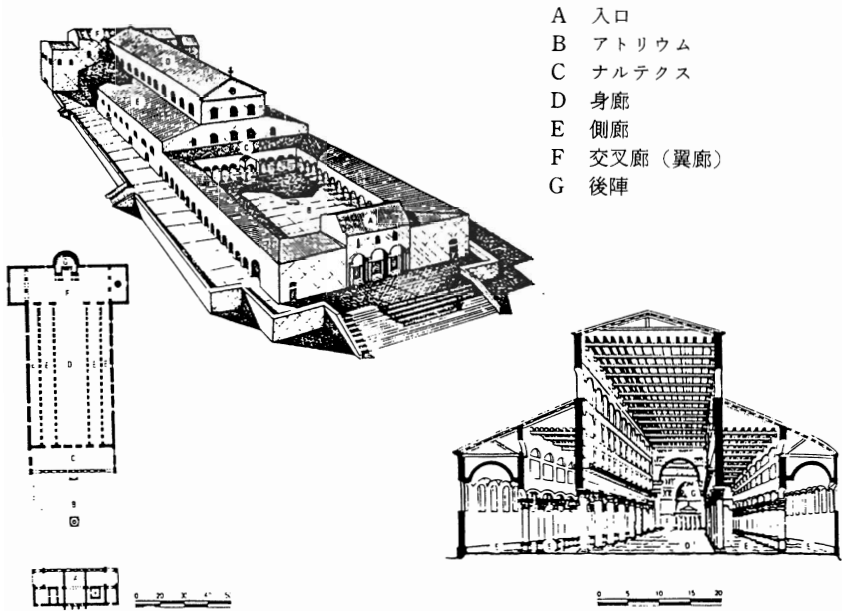


図 2. ローマ、サン・ピエトロ旧聖堂（復元図）、330 年頃

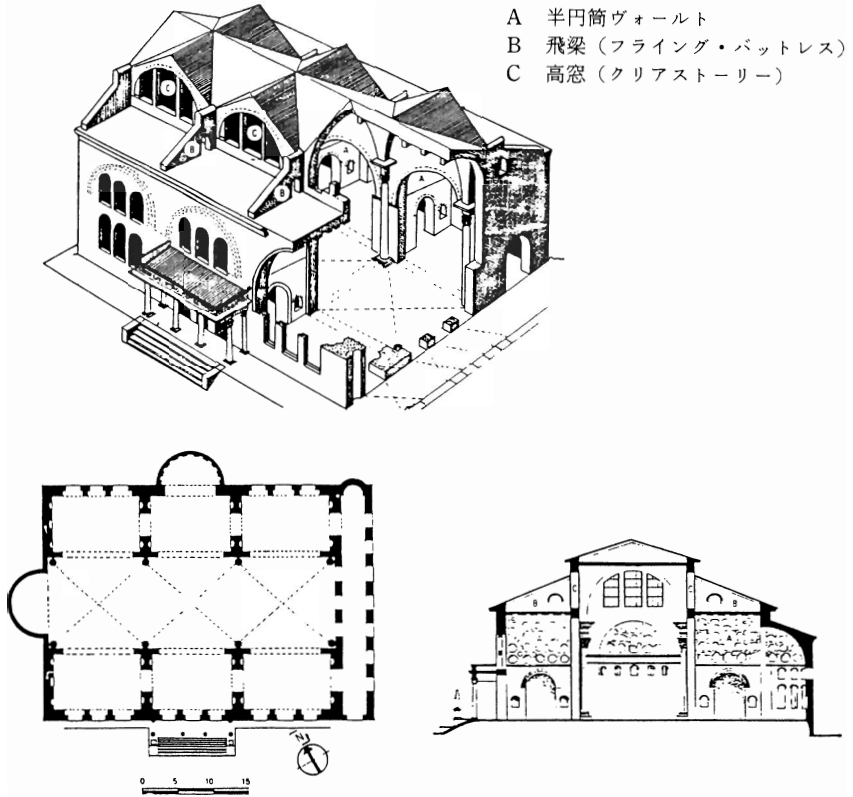


図3. ローマ、マクセンティウスの公共バシリカ、310年頃

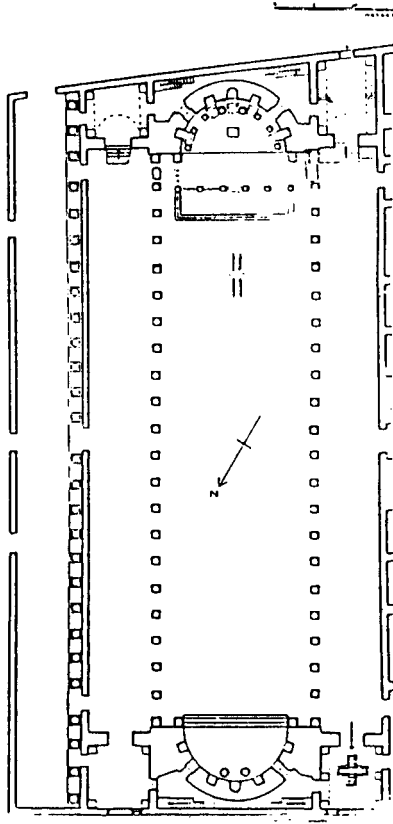


図4. レプティス・マグナ/リビア、セプティミウス・セウエールス帝のバシリカ、紀元216年

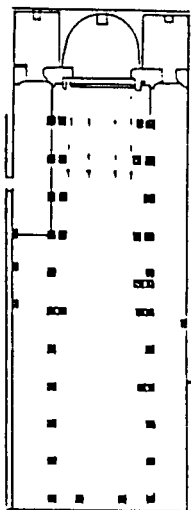


図5. チュニス/北アフリカ、ティバサのバシリカ、200年頃

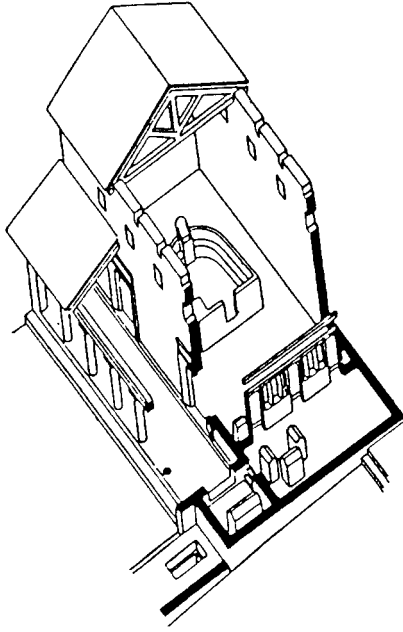


図6. キルク・ビゼ/シリア、私宅教会、5世紀
(Qirq-Bize)

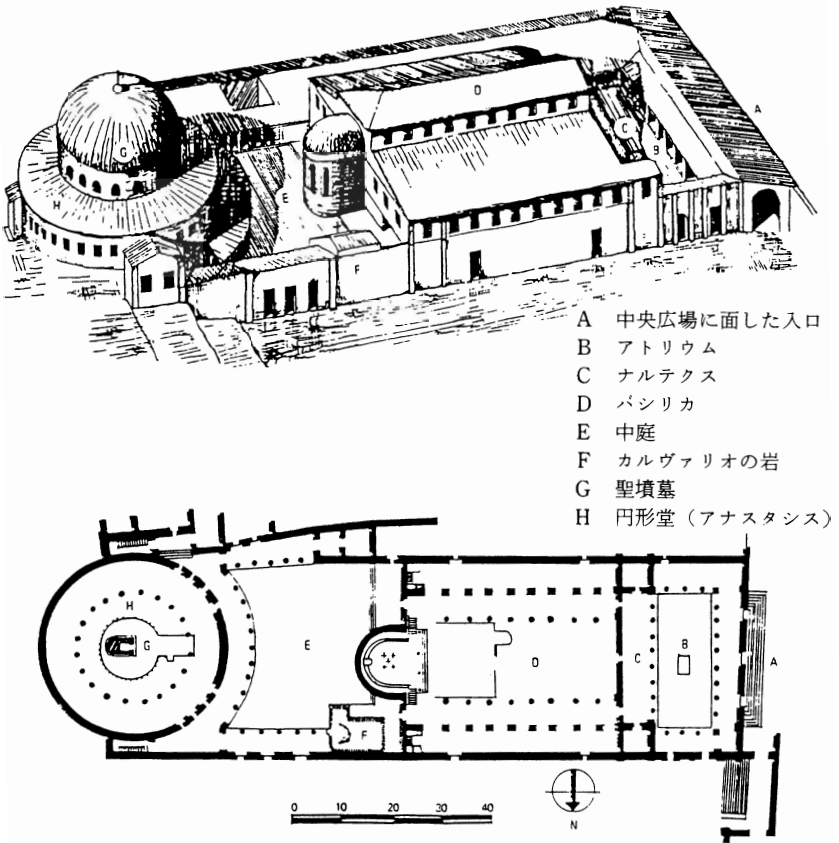


図7. エルサレム、聖墳墓記念聖堂（復元図）、345年頃

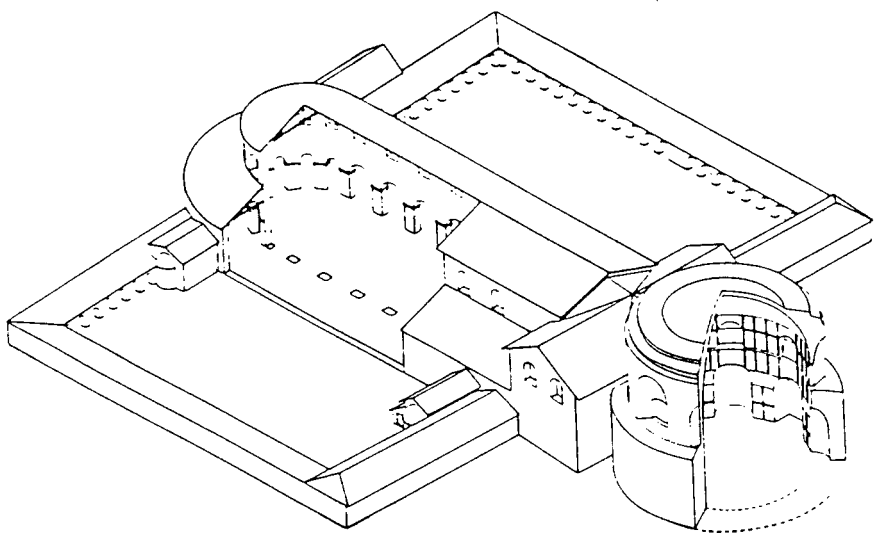


図8. ローマ、霊廟付き、サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノの
周歩廊バシリカ、330年頃

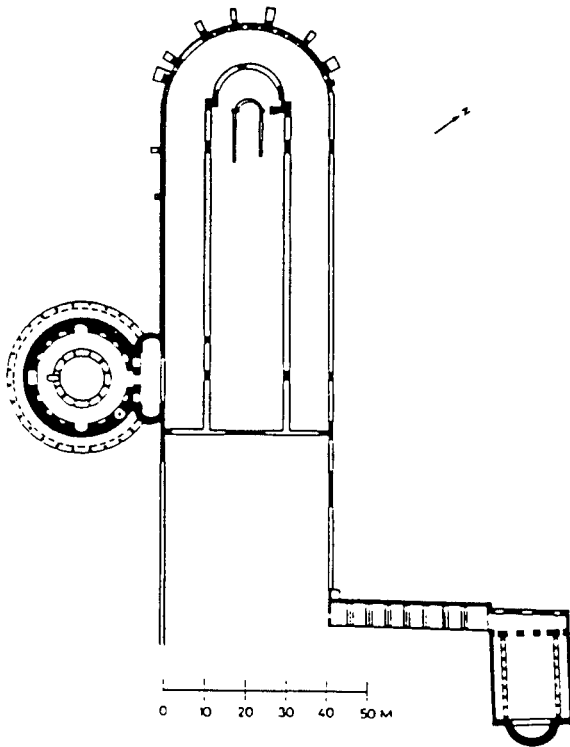


図9. コンスタンティアの霊廟、周歩廊バシリカを備えたサンタ・コスタンツァ廟堂、350年頃

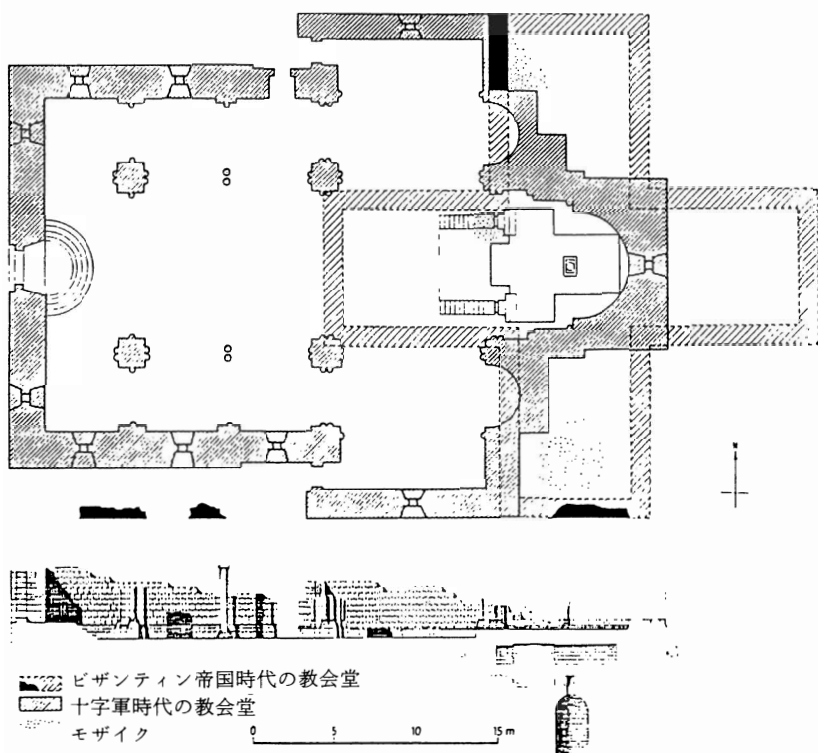


図 10. シェケム、ヤコブの井戸上の巡礼参詣教会、420 年頃

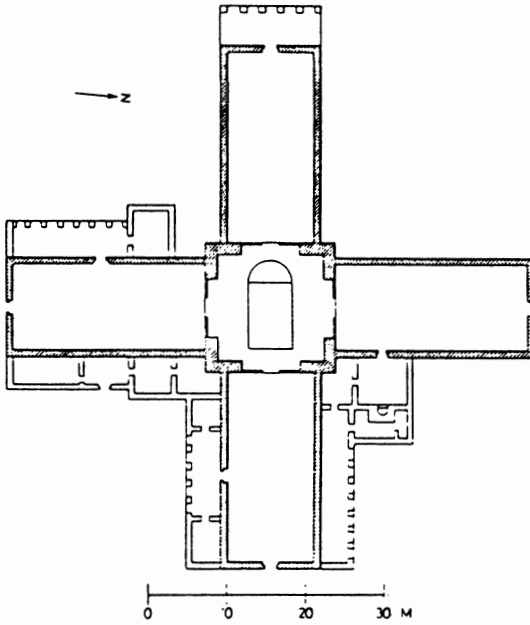


図 11. アンティオキア/カウシェー、
聖バビュラスの殉教記念堂、紀元 381 年
(Antiocheia/Qausi'ya)

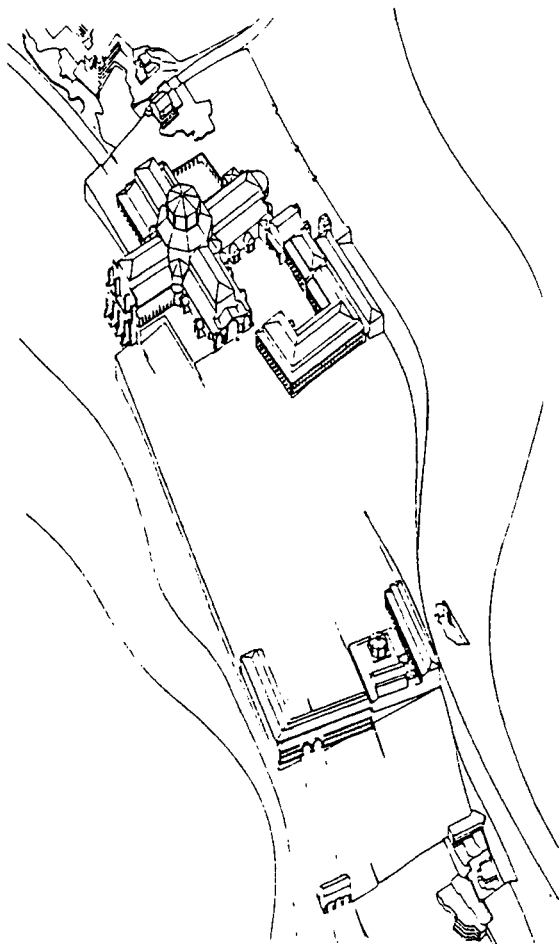


図 12. カラット・シマーン/シリア、柱頭隠者聖シメオン（大）
の修道院聖堂（復元図）、480 年頃
（Qual'at Sim'an）

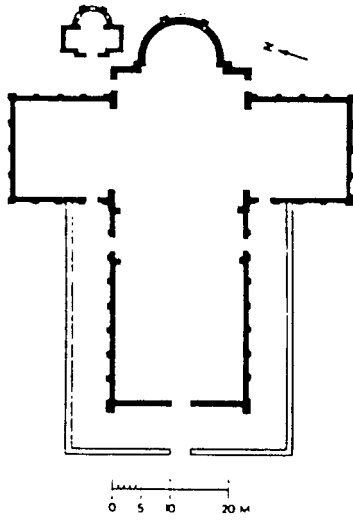


図 13. ミラノ、聖シンプリチャーノの十字形バシリカ、390 年頃

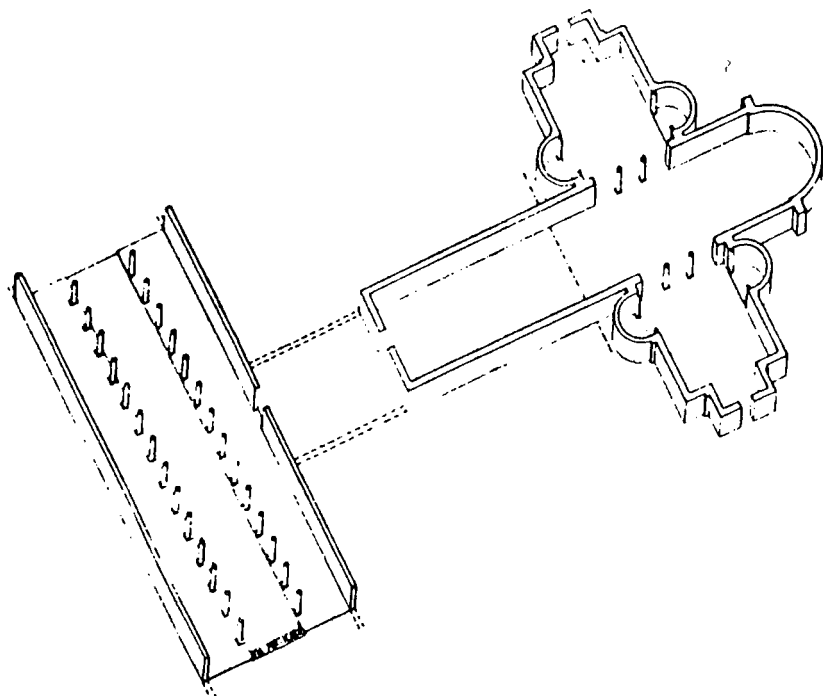


図 14. ミラノ、聖使徒教会堂、4世紀末

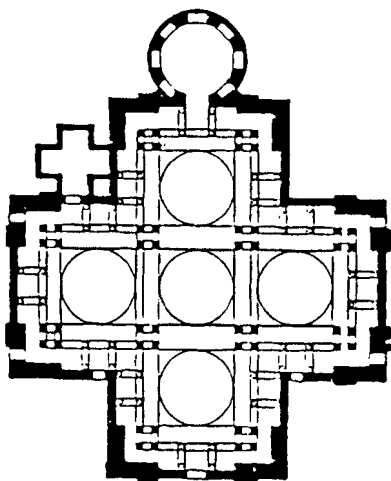


図 15. コンスタンティノポリス、聖 12 使徒教会堂（未発掘）、330 年頃

ÜBERLEGUNGEN ZU DEN URSPRÜNGEN FRÜHCHRISTLICHER ARCHITEKTUR

Alfonso M.FAUSONE

Der Autor des Artikels versucht einige Ergebnisse, die zur Klärung der Ursprünge der frühchristlichen Architektur von den Archäologen und Architekturhistorikern im Laufe der letzten Jahrzehnte hervorgebracht wurden zusammenzufassen und das eigentlich NEUE an der frühchristlichen Architektur aufzuzeigen.

Die Fragen zur Problematik der frühchristlichen Architektur sind noch nicht vollständig gelöst worden, aber durch die intensive Ausgrabungsarbeit der Archäologen hat man heute ein vollständigeres Bild von den Möglichkeiten, die die Architektur des zweiten, dritten und vierten Jahrhunderts einer ständig wachsenden christlichen Gemeinschaft anbieten konnte.

Die geistige Grundlegung der frühchristlichen ECCLESIA und die materielle Verwirklichung im liturgischen Bau zeigen deutlich die NEUHEIT des christlichen Kultbaues, der sich in seiner Materialität aus dem Formenreichtum der Spätantike herausgestaltet um einer neuen Gesellschafts- und Religionsordnung zu dienen zu stehen.